

九部合して廿七部であるが十九より廿七までの九部中には日本製作のものなどが雜つてゐるかも知れないし又重復もあるらしいが兎に角撰號があつて略年代の判明せるものが都合十七部ある（毗跋羅撰を除く）。其中神泰、玄應の撰述は古論に據つたか新論に據つたか不明であるがそれ以前の七部は古論に據つたものと見なければならぬ。其以後は勿論玄奘譯に據つたものである。併し佛教教理史上重要な意義

を有つてゐた攝論宗例へば『淨土初學鈔』中攝論宗の下に記せられてゐる様に「攝論梁代傳來此土、爾後百年之間世多不修淨土之業」といつた程の影響があり特に眞如緣起賴耶緣起に關する大切な資料であつた攝論宗は梁論に據つたもので梁論の章疏が今日に残つてゐるとするとそれは佛教史上の珍とすべきである。

## 赤土考補遺

桑田 六郎

余は先きに東洋學報第九卷第三號に赤土考一篇を掲載し、隋の赤土國は普通に考へらるゝ如く今の暹羅にあらずして、唐の室利佛逝なるべきかと云ひし

が其後浙江圖書館叢書第一集を見る機會を得て、そこに丁謙氏の隋書四夷傳攷證の中に氏の赤土論を發見せり。又高桑駒吉氏は余の赤土考に對して反對説を東洋哲學第廿六編第十號に「赤土國に就きて」と題して掲げられたり。されば余は再び赤土を論じ兩氏の説を批判せんと欲す。

## 一

丁謙氏は云はく

按明史暹羅傳、謂卽古赤土國、誤甚、此傳明言國在南海中、北距大海、暹羅之北安有大海、況常駿等往使、自南海郡今廣州府乘舟、行二旬餘、先望見狼牙須國山、乃南達其國界、而其還也、浮海十餘日、至林邑東南、乃循岸北行、達交趾、揆度形勢、其國當在馬來半島巴大年吉蘭丹丁噶奴等部地、或謂赤土國既在南海中、安知非蘇門答刺爪哇諸島地、曰否、觀先見狼牙須國山然後至其國界、知國在狼牙須南、攷新唐書盤盤國傳、南與狼牙須接、而其北接環王國卽林邑是赤土北爲狼牙須、再北爲盤盤、再北爲林邑、雖在海中、仍有陸地、與林邑相連、則爲馬來半島、毫無疑義、馬來半島地形迤斜、其北面距海處、惟巴大年等三部、由是推之、焦石山必湄公河口之山、船至

此暫停、仍轉向東南、經崑崙島、卽傳所謂陵伽鉢拔多洲、又直南行抵獅子石、必普林的安群島之一、故曰島嶼連接、雞籠島在其南、則格特勒丹島也、陵伽鉢拔多洲、下眞臘傳作陵伽鉢婆山云山近眞臘都、眞臘國都北去林邑一千餘里、傳當云西與眞臘相對、云林邑者誤、且其還時、海行十餘日、至林邑東南、亦當至眞臘東南、蓋眞臘以北、方有海岸可循、以達交趾、至云自其國界、行百餘日、至王都、以意測之、赤土所都、當在今麻刺加地、婆羅刺卽婆利、今婆羅州、婆羅娑唐書婆羅、言赤土西南入海至其地、國當在蘇門答刺島中、上二部但言東西、不言相接、以均隔海故。

是によれば丁謙氏は赤土の北は海なる故、赤土は暹羅なる能はずと云ふ、此の點は余と見解を同じくす。されど赤土を馬來半島南部と考ふるは、余と全く異なる。丁謙氏は新唐書南蠻傳攷證の條に盤々の

位置を「所部當在馬來半島北、梅格龍 Meklong 及古夷 Kuvi 地」と考へ、狼牙須を「地在盤々南當在斜仔 Chaiya 六坤 Lakon 境」と考へしかば、赤土はその南の把大年 Patani 吉蘭丹 Kelantan 丁噶奴 Tengsaun となせるなり。氏が盤々の南に狼牙須ありと考へたるは可なり、但し氏は新唐書に盤々の南と明言せる如く云へるも實は然らず、新唐書に「盤々在南海曲、北距環王、限小海、與狼牙脩接」とあるは、是れ舊唐書に「在林邑西南海曲中、北與林邑隔小海、（中略）其國與狼牙修國爲隣」とあるを改めしもの小海は明に暹羅灣、又舊唐書に「墮和羅國南與盤々（接）」と云へば狼牙脩は盤々の南隣と考へざるべからず（東洋學報第三卷一二九—一三〇頁）。されどその位置は丁謙氏の比定は普通に考へらるゝ比定に比して稍北に偏したり、盤々狼牙須に就きては尙ほ後に説く所あるべし。丁謙氏は又常駿等は狼牙須國の山を西に見て南下せる故、赤土は狼牙須の南に隣接すべく、蘇

門芥刺爪哇諸島地にあらすと云へど、果して隣接する地方なれば、赤土の四周を云ふ時、赤土の北は狼牙須と云ふべきにあらずや。氏は又赤土の東の婆羅刺を婆利と共に今の婆羅島 Borneo に比定すれど是は甚しき誤解なり（赤土考第三章婆利考參照）北 Borneo の Brunei 即ち勃泥に婆羅を當つること張燮に始まる。東西洋考の東洋列國考の條に「文萊即婆羅國東洋所盡西洋所自起也」と云ふ、文萊は Brunei の新譯、萊を以て nei をうつすは Manila を蠻里刺と譯すに同じく屢々行はる例なり。（開國圖志卷十八）「即婆羅國」の婆羅は按ずるにその前には古或は唐の文字なければ、此の婆羅は大明一統志<sup>卷九</sup>の婆羅を云へるか、何となれば「麻六甲即滿刺加也」「啞嘑即蘇門答刺也」の滿刺加蘇門答刺は一統志の用ふる字なり、若し然りとすれば婆羅は張燮時代實際に用ゐしものにあらずして張燮の比定する所に過ぎず。一統志に渤泥國あり、洪武四年入貢し、永樂三年渤

泥國王に封ぜられ、六年國王入朝して南京會同館に卒す、而も一方に婆羅國あり、前代無考永樂四年入貢すと云へば、此の婆羅は明かに渤泥にあらず。但し大明會典卷九十八は是を婆羅と書けるも恐らく誤なるべく、婆羅は爪哇の東の Brili を云ふこと唐と同じかるべし。張燮は渤泥を太泥 Patani, Tani と混同せる上に重ねて此の誤りをなせり。按ずるに明初まで渤泥の名用ゐられ明末に文萊の名用ゐられしもの如し、然るに清代には如何と云ふに魏源の開國圖志卷十二によれば、婆羅島（萬國地理全圖集）文萊即古婆羅國（海國聞見錄）文萊國（海錄）婆羅島又名文萊（地理備考）婆羅洲（每月統紀傳）婆羅島（外國史略）婆羅洲一作摩泥（瀛海志略）即ち婆羅と文萊と混用せられ、且島名を生ぜるは是れ歐洲人の Brunei より Borneo なる島名を作り出せる形式に同じく、最近支那第九卷第二號には中華民國は British North Borneo を婆羅島と譯するに決せりと傳ふ。

れは張燮が誤りて婆羅を文萊に比定せるが原因となり、遂に Brunei の對音にもあらざる婆羅を使用するに至れるにて、これこそ僞より眞を生ぜりと云ふべきものなり。丁謙氏は赤土の西婆羅婆を新唐書の「赤土西南入海得婆羅」の婆羅に比定すれど吾人は此の文句を疑ふものにて、是を以て赤土の位置を定むるは危険と考ふるものなり、且單に論理上より云ふも此の文句の赤土と婆羅は相互に關聯するものにて何れか一を他の方面より考證するにあらざれば他の一を推定する能はざるものなり、換言すれば赤土を馬來半島南部とするが故に婆羅を蘇門答刺の北端とするに止まり、若し赤土を他の地に比定すれば婆羅も亦從つて移動し得るものなり、從つて婆羅を蘇門答刺なりと云ふを他の史料より確實に證明するにあらざれば是を以て赤土の位置を考ふる參考にする能はず。丁謙氏は赤土の南訶羅旦には説明を與へず。氏は又初めに赤土は Patani, Kelantan, Trengganu 等地と

云ひ、後にその都は滿刺加 Malacca ならんと云ふ、その間に矛盾はなきか、又滿刺加はかく古き都會にはあらず、又赤土の都が滿刺加の如き地なれば北は海なりと云ふより南は海なりと云ふ方寧ろ云ひ易きにあらずや。丁謙氏は又焦石山を渭公河口 Mikong の山とし陵伽鉢拔多洲を崑崙島 Pulau Condor とし且眞臘傳の陵伽鉢婆山と同一にて「西與林邑相對」は眞臘の誤なりと云へど、隋書によれば眞臘は大業十三年に初めて通ぜるもの、常駿等の知る所にあらず。又眞臘の陵伽鉢婆山は都に近しと云へるに是を海上遙かの沖にある Pulau Condor とすれば眞臘の都は何處にあるべきや、海岸にありても尙ほ遠し、況んや深く内地にあるに於てをや。丁謙氏は更に丹々を吉蘭丹 Kelantan に當つれど、そこに何の根據を見出す能はず。又氏が獅子石を當てし普林的安群島及び雞籠島を比定せし格特勒丹島とはその如何なる島を云へるか余未だ解する能はず。

## 二

次に高桑氏の赤土説に就きては嘗つて石田幹之助氏より高桑氏に赤土に關して一説あるを注意せられしも、余は氏が特に南方の研究をせられしを聞かざりし故、一寸せる思ひ付きに過ぎざるべきかと考へ親しく其の高説を聽くことを怠りしは余の不注意と云はざるべからず。されど高桑氏の説は要するに吾人の豫想に遠はざりき。氏の説は概ね獨斷的にして前人の研究を無視し、前人が如何なる根據によりてその説を述べたるかを討求批判することなく、唯専ら氏はかく考ふと云ふに止まり、その考證は殆んど考證の體を備へず、加ふるに考證を要するものにて省略せられたるもの少からず、余は今次ぎの四段に分ちて氏の説を見んと欲す。

一、僧祇城は Singora なりや

二、狼牙須は Langsuan なりや

## 三、赤土の四周の解釋に就きて

## 四、赤土に就きて

(一)僧祇城 高桑氏云はく「赤土國王の居城僧祇城  
サンクラ Sangkla またはシンクラ Singkla てあつ  
て、今のシンクラ Sangkla 州の東南海濱にある  
スンクラ Sungkla またはシンゴラ Singora の港  
であらう。杜氏通典卷百八十八に「赤土國……居  
僧祇城、亦曰獅子城」と記する獅子城はサンスクリ  
ット語のシンハラ Sinhala または Sihala であるか  
ら僧祇城はシンハラからシンクラ、サンクラに轉じ、  
更にシンクラがシンゴラに、サンクラがスンクラに  
轉じたのであらう」と。氏は又欄外に附加して馬來  
語にて獅子は Singa なれば僧祇城は Singakala,  
Singkara, Singora なりと云ふ。ちれど獅子城は果し  
て梵語 Sinhala なりや。梵語にて獅子は Simha な  
り、城は Pura なり従つて獅子城は Simhapura にあ  
らずや。梵語 Simha は馬來語にて Singa となり、

Pura は變らず (Wilkinson, Malay-English Dictio-  
nary) 従つて獅子城は馬來語にては Singapura なり。  
その一例としては今の Singapore を舉ぐべし。Singa-  
pore は正しくは Singapura にてその獅子城の意味  
なるは人の皆知る所なり (J. Crawford, A Descrip-  
tive Dictionary of the Indian Islands, Singapore の  
條) 是に反して高桑氏の云ふ所の Sinhala は今の  
Ceylon の國名なり、法顯始めて是を師子國と書さ  
てよりその名を用ゆるもの多きも、玄奘は僧伽羅即  
ち Sinhala を執師子國と譯し、その名の因りて起  
る所の傳説を傳へたり、織田氏の佛教大辭典は獅子  
國を執獅子國の略と認む。次ぎに梵語 Simha は漢  
字にて僧伽彼、梟伽、僧伽、僧訶を以て當つ。然らば  
隋書の僧祇城は果して通典の解する如く獅子城なり  
や。吾人は敢て「解す」と云ふ、何となれば通典の  
赤土の記事は隋書若くは隋書の用ゐたる史料に基づ  
き、それに蛇足を加へたるにすぎず、別に新史料あ

りて書けるにあらず、此の事は既に赤土考第六章に述べし所なり。僧祇は普通に梵語 *Singhika*（譯衆、數）の對音とせらる隨書は僧祇城と書きたれど是の僧祇は僧祇の誤りなるべしと察せらる。さて然らば杜佑の通典の如く是を獅子城と解することに就きては多少の疑ひを有せずんばあらず。然れども不幸にして梵語の智識なき余は此等の點に關して不明を免れざるを遺憾とす。されど要するに僧祇城を獅子城と解するも、そは *Sinhapura*, *Singapura* にて *Sinhala* にあらざれば、此の點を以て赤土の都僧祇城を今の *Sungka*, *Singora* に比定すべき理由存在せざるなり。

高桑氏は又通典に「冬至之日、影直在下、夏至之日影在南」は「冬至之日、影在北、夏至之日、影直在下」の誤なりと云はるゝも、何を根據としてかく改め得るや。通典は「冬至之日、影直在下」は今日の進歩せる智識より見れば承認し難きも、當時の不完全なる地理

學上の智識を考へて見る時は、通典の文句は唯南方の國なるを示すに止る點に於て何等の差支へなき文句なり、吾人はその中に誤字を認むる能はず、却つて高桑氏の説の如く夏至之日影直在下なれば北緯七度の邊にある *Singora* は到底赤土の都たる能はず。氏は又通典に「戸皆北向」を説明して南西の *Monsoons* と強烈なる日光を避くる爲めなりと云へるは恐らく正當の解釋なるべし。されど此の文句は唐代の挿入句にて常駿の實際見聞せし所にあらず、且又當時は赤道に關する智識を有せざりしかば、是によりて赤土は赤道以北ならざるべらずとは云ふ能はず。

(二) 狼牙須 高桑氏は「蓋し常駿等の船は北緯九度の邊で暹羅灣を通過して馬來半島に近づきより遙に西の方狼牙須國の山を望見したのであらう。然らば狼牙須國は北緯十度から八度附近に互る馬來半島東海岸でなければならぬ、今十度附近に暹羅領のラングスマン *Langsman* 州がある、是れ恐らく狼牙須

の古名を存する地であつて云々」と云へど、此の論の最初の前提となれる九度の邊にて暹羅灣を横斷したと云ふのは、確實なる前提にてそれより推論を導き得るものなりや。吾人を以て見れば是は單に氏の想像にて氏の赤土論に便利なる様に作られたる假説に止る。抑々狼牙須の名は隋以前にも又隋以後にも現はれる國なれば、是を單に隋書のみにて論定せんとする高桑氏の方法は明かに非科學的研究法と云はざるべからず。狼牙須に就きては多數の學者の苦心の研究あり、我が國にても東洋學報第三卷に藤田豊八氏の詳細なる狼牙須國考を載せたり。若し狼牙須に就き論ぜんと欲せば少くも藤田氏の狼牙須國考は讀まざるべからず。されど吾人はこゝに藤田氏の論を再説して讀者を煩はすに堪へず。高桑氏は又 *Langsuan* をラングスアンと讀めどそは誤れり、正しくはランスアンと讀むべし。H. W. Smith氏によれば *Langsuan* は the garden of the Lower, or

south, country の意にて coconut, banana の樹多く果實の香高き故此の名を附けたりと (Five Years in Siam, P. 58-59) ランスアンは宋以前の狼牙須 (或脩) 或は郎迦戌と音の上に一致せず、況んや宋より明初まで凌牙須或は凌牙須加、龍牙犀角或は狼(牙)西加 *Lankasuka*, *Lengkasuka* として知らるに於いてをや。最近 G. Coedès 氏は *Cholas* 王朝の *Rajendrachola* I. (1012-1042 A. D.) 即ち宋史の注蠻國の尸離囉荼印他囉注囉一世の inscriptions の一に王の征伐せし國の一として *Langitocogun* 國あり、此の I は *Tamoul* 語にて l m n r に始まる外國の音に附加するものなれば、是れ *Nagarakriyagama* に爪哇の滿者伯夷 *Majapahit* 王國の屬國に數へし *Lankasuka* 及 *Kedah* の古記録 *Marong Mahawanso* の *Lankasuka* なりと (B. E. F. E. O. XVIII, 〇 ㉗㉘) *Lankasuka* の名は宋初まで溯り得。又狼牙須を *Langsuan* とすれば狼牙須の北、墮和羅 *Dvarapatri* の南にあるべし



盤々或は槃々 *Pun-Pin* は狼牙須の南となるを如何にすべきや。(東洋學報第三卷第一號一二六一—一三〇頁)

(三) 赤土の四周 高桑氏は初め隋書の記事を読み直覺的に「赤土は今の *Ligor* 州から *Patani* 州に至る間であらねばならぬ」と云ひ「即ち隋書に記する赤土國の位置によつて見ると、其の東の婆羅剌國は今の *Kalantan* 州の *Kota Bharu* であらう、*Kota* は梵語から馬來語に入つた城の義である故に地名は *Bharu* であつて當時此の地方の都城であつたから、婆羅剌國と記したのであらう」と云ふ。馬來語 *Kota* の梵語 *Kuta* より來れるは云ふまでもなし。氏は *Bharu* を地名とするも果して然るや。*Kota Bharu* の名は他所にもあり、*Swettenham* 氏の *British Malaya* の地圖によれば、此の他に *Patani* 河の中流に一ヶ所 *Malacca* 海峡に面する *Dingding* の東方に一ヶ所あり。又外務省移民調査報告第八の地圖にも *Ko-*

*lantan* 河口の *Kota Bharu* の他に *Patani* 河の中流に一ヶ所、又鐵道院の地圖によれば *Sumatra* には *Jambi* の北に一ヶ所 *Padang* の北に一ヶ所あり。よつて按ずるに *Bharu* は地名にあらず、*Kota* と結合して城名として適當なる語の如し。然らばは *Siva*, *Vishnu* に對して用ゐらるゝ梵語 *Bharu* にあらざるか。高桑氏は又新唐書環王傳の「赤土西南入海得婆羅總章二年云々」に就きて余の考察を誤解せり。余は此の記事を信ずる能はず、何となれば總章二年頃赤土の名存すれば義淨頃の人々も是を聞知すべき筈なるに義淨等は絶えてその名を傳へず、但し婆羅が總章二年に入貢せしは事實にて、その婆羅は婆利と同一なるべきことは赤土考頁三五四—三五五に論ぜし所なり。余は「赤土西南云々」は唐代或る學者の机上に作られし文句にて赤土の史料となし難しと認めし故是を赤土考第六章に引用せるなり、又若し是を赤土の位置を定むる材料にせんとすれば此

の婆羅を他の史料にて確定せる上にあらざれば丁謙氏と同じ誤に陥るべし。

高桑氏は東の婆羅刺を Kota Bharu に比定せしと同じ方法にて西の婆羅娑を求め「赤土の西の婆羅娑國は其の對音の地名を發見するとは出来なかつたが強ひて之を求めば Kodah の北部 Peris にはあるまいか、今尙ほ 王 Raja があつて此の地方を領し暹羅に朝貢して居る」と。吾人の云ふ「同じ方法」とは何か。そは即ち氏が一千有餘年以前の隋代の國名を現代の地圖に求めその間に連絡を顧みざるを云ふ。少くもかゝる比定を行ふ前に Kota Bharu, Peris の歴史を調査するか、或は唐宋元明を通じて半島の是等の地にかゝる國ありしや否やを考ふる必要なきか。今日 Raja のあることは隋の國名を比定する際何の價值ありや。遠き過去の名が必ずしも今日に傳はるものにあらず、現に明代支那に知られし名にして今日存在せざるもの少からず、然るを強ひて妄りに音

の類似より過去の名を現代の地圖に求めんとするは危険なる方法と云はざるべからず。少くもその間に多少の連絡を附くる必要あり。是は赤土そのものに就きても云ひ得。若し赤土の僧祇城をして今の Soliged<sup>1</sup> ならしめば、唐宋時代に赤土の名傳はらずとも僧祇國の名は傳はるべし、然るに實際はそのこと無し。高桑氏は吾人が赤土の名唐代に傳はらざるを疑へるを、簡單に興亡盛衰交通の有無を以て論ぜり。されど余は赤土の如き大國一朝にして衰へ義淨の時代に全然その姿を隱すとは信じ難し、且又唐代に全く衰微せるものが遙かの今日に於て立派にその名を傳ふる事に矛盾はなきか。Peris は河の名としては常に Peris の如きも、都會の名としては Polit<sup>2</sup> とも書けり。

赤土の南訶羅旦に就きては、高桑氏は「今の Kailantan 州であらう、桑田學士は Soliged<sup>1</sup> 氏が予と同じく之を Kailantan とせるを非難して居るが、桑田

學士も亦宋書の呵羅單を閩婆の中央と見る爲め「要之宋書の呵羅單訶羅陀は隋書の訶羅」唐書の訶陵にて中央爪哇なり、是を南ニ云ふは不當なれど實際の南は山地にて國のあるべき所ならず、然るに上代支那地理學者の癖として、強ひて四周を記し、以て其の位置を明かにせんとする風あり、從つて婆利を東とし訶羅單を南とせるにすぎず」と云ふて居ると同様に、予もまた隋代の支那人が聲音の類似から Kalantan を宋書に記せる呵羅單と混同して訶羅單と記したのであると見れば問題は解決されるのであるが、予には別に考へがある、思ふに訶羅單は Kuastana であらう、Kuala は馬來語で河口の義であるが河の意味に用ゐられて居る、Stana は梵語で地の義である、故に Kuastana はもと印度住民の建てた國であつて今の Kalantan から南の Perak を包括した地であつたのであらう。かくて Kuastana の古名が残つて後に Kalantan となつたのである。

いか、故に唐書にある哥羅訶羅單であつたと考へるのである（今の Kalantan ではない）」と云ふ。此の文章は余に取つて頗る難解なり、その趣旨那邊にありや容易に悟り難し。されど按ずるに氏は吾等が宋書の呵羅單及訶羅陀、隋書の訶羅單、唐の訶陵を同一に見るに反對して隋書の訶羅單のみ Kalantan とさせるものゝ如し。然る時は氏の説は初めの三者を共に Kalantan とする Schlegel 氏の説とも同じからず。氏は又初めには訶羅單は「今の Kalantan 州であらう」と云ひながら、後には Kuastana にて今の Kalantan にあらずと云ふ。按ずるに始めの説は Schlegel 氏の説にて、後の説こそ氏自身の説か、或は初め「Kalantan であらう」と云へるは唯音に就きてのみ云へるか。高桑氏は馬來語 Kuala は河口の義なれど河の意味に用ゐられると云へど、そは誤れり。Wilkinson 氏によれば Kuwala-The mouth or estuary of a river, the point of junction of a tribu-

tary stream and a river. とありて河の意味なし。  
Kuala Perlis, Kuala Kelantan は Perlis 河口 Kelantan 河口の意味に過ぎず、又内地に入りて河に沿ひて Kuala の名あるは支流の合する點なり。高桑氏は是を梵語 Stana と結合せしめて Kualaстана となし印度移住民の建てし國と想像すれど是は無理ならずや。何となれば Kualaстана によつて如何なる意味を現はし得るか、かくの如き結合を試むる時は岬を tanjong と云ふが故に Tanjongstana と云ひ得べく、山を bukit と云ふが故に Bukitstana と云ひ得べく、全く際限なき事なり。又氏の用ゆる梵語 Stana 正しくは Stana は the place of standing or staying にて仕處の意味を有す、従つて Sakastana, Chinastana と云ふは得るも Kualaстана とは云ふ能はず、金を産する國を Svarībhumi, Svarnadīpa とは云ふ Svarīstana と云ふはず。波斯語の語尾 stan も亦同じ、例へば Turkistan, Afghanistan,

Balchistan の如し、Hindustan も是を Indus 河の地と解すべきにあらず、Hindu 人の地と解すべきなり、何となれば波斯人は Hindustan にて印度全體を稱し單に Indus 河流域のみを云はず、又 Hindustan に對して Gangestan の名なければなり (Lippincott's Pronouncing gazetteer of the World, Hindustan の條參照) されば吾人は Kualaстана なる名の存在を疑ふ。又高桑氏の説の如く今の Kalantan が Kuala-stana の名残りとするは、廣く Kalantan より Perak に互りて用ゐられし名稱が何故今日 Kalantan と云ふ河の名として残るに至れるかその説明は如何、殊に高桑氏は唐書の哥羅をも是となすに於てをや。何となれば唐書の哥羅は賈耽の哥羅なるべく是は滿刺加海峡の北岸にありし國なることは明かなれば、その名が東海岸の Kalantan に残ること益々怪しむべし。高桑氏は唐書の哥羅も訶羅旦なりと暗示するのみにて、その考證は他日に譲ると云ふ。されど吾人

を以て見れば哥羅と呵羅旦との間に關係ありや否やは氏の *Kalastana* の説の純粹に想像に止るに比して多少實際的問題にはあらざるか。哥羅は未だ十分なる解釋を見ざるもの、余は氏が此の適當なる機會を故意に逸せることに一種の不滿を感じずんばあらず。翻つて若し赤土の南訶羅旦を今の *Kelantan* 州とすれば、同じ地方にある *Kota Bharu* を赤土の東婆羅刺と比定せるに重複す。高桑氏は *Schlegel* 氏の如く簡單に訶羅旦は今の *Kelantan* なりと云ひ切る能はずして、*Kuala-stana* を案出せるも此の重複を避けんが爲めの窮餘の一策の如し。

赤土の北の大海に就きては、高桑氏は云はく「暹羅灣であらう、即ち六坤 *Lakhon, Ligor* の東北から海岸線が次第に西に進入して *Bandon* の北に至り急に深く西南に曲つて居るを見れば「北距大海」に一致する」と。されど氏は初めに赤土は六坤より太泥に至る間と云ひ、後に狼牙須の條には隋代にはその

疆域 *Langsuan* より更に南方に延び今の *Chayya* 及び *Bandon* に達せるかと云へるにあらずや。若し赤土を六坤太泥間とすれば、東を海とし北を狼牙須とすべし。元來赤土の境域を明かに決定すべき材料は隋書には無し、氏の云ふ所は氏一人の想像に止まる。若し赤土の境域を狭く *Singora* 附近とすれば北は大海と云ふこと益々當らず。

(四) 赤土 高桑氏云はく「馬來半島の中へ *Kalantan* 以北の地質は殊に花崗岩質及び石灰石質が多く、また太泥から六坤に至る海岸には到る所赤砂岩が露出して居ることは西洋の旅行家及著述家の多く記する所であつて、その最も著しきは予が赤土の國都であつたと認める *Singora* 市の北に當る十數丁の小海峡を隔てし *Kaw Yai* の南端に屹立する *Kiao Deng* である、*Kiao Deng* は暹羅語にて赤山の義であつて此の地方の海岸一帯に赤砂岩が多くあるのを見ると隋書の赤土傳に「所都土色多赤因爲號」と記する事

實に一致するのである」と。されど吾人は是を嚴密

に批判する必要あり。先づ赤砂岩とは何か又氏の赤土の比定に都合よき様六坤より太泥の間の海岸に至る所赤砂岩が露出せりと云ふは事實なりや。高桑氏の説の根據とせる書物を挙げたる故余の如き淺學の輩は氏の云ふ所に多少疑を起さざるを得ず。 Kao

Deng 氏 H. W. Smith 氏の Five Years in Siam に記載せられ氏は是を red sandstone hills と云ふ。これと海岸至る所赤砂岩露出せりと云ふ Smith 氏は云はず、又 Kao Deng の名を有する山は Singora の北にあるものゝ他其の地方に數多ありとは云はず、若し高桑氏の云ふ如く其の地方の海岸に至る所赤砂岩露出し居れば特に Singora の北の山丈を赤山と云ふは怪しむべきにあらずや。吾人は高桑氏に書を送り此の赤砂岩に關して參考書の教示を求めし所氏は深切に James Low 氏の The Geological Appearances of Portions of Malayan Peninsula の中に次の如き記事

あるを指摘せられたり。

Along the shores of the Chumphu and Chaiya districts, ferruginous strata are prevalent, and leadstone is said to be procured from them. Proceeding northward till within about a day's coasting of the Siam river, a hill termed K'haw Deng or "the red hill", appears on a point of land. The coast is covered with ferruginous earth and strata, but of these no specimen have been obtained

是によれば氏の赤砂岩とは ferruginous earth の事の如し。北暹羅に著し Old Red Sandstone 馬來半島には及ばず。馬來半島が granite を backbone としその上を limestone 及び ferruginous strata にて被はるゝは事實なり。高桑氏は此の ferruginous strata が hematite なるを教く然る hematite は granite と limestone の所にあるを通例とせられ馬

來半島の ferruginous strata は hematite なるべし。而して夫の Kao Deng は此の露出せるものか。又半島の諸所に Tanah Merah と名付くるものあり、余の知る所にては Kelantan 河の中流に一ヶ所（外務省移民調査報告第八の地圖及 Swettenham, British Malaya の地圖）Kedah 河と Alor Star より十二哩溯る所に一ヶ所あり（A. Wright, The Malay Peninsula, p. 185）是れ恐らく Kao Deng と同じ種類なるべし。かくの如く赤土の名は廣く分布すとすればこの點を以て赤土國を求むれば馬來半島の大部分何處にも比定し得べし、高桑氏は六坤太泥間に赤砂岩の露出多しと云はるゝが豈にそこに限らんや。高桑氏は又 Patani の一名 Tani は暹羅人は Chana と云へるが、Tani 及 Chana は馬來語 Tanah の轉訛なるべし、果して然らば是れ恐らく馬來語 Tanah Merah の名残りであつて Merah が省かれて Tanah となり、後に Tani に變じ暹羅は之を Chana に轉

ぜしならんと云へど、是は餘りに臆測を逞うせる説なり、先づ Tani が訛りて Patani となるか或は Patani の Pa が省略せられて Tani となるかを決定するにあらざれば一步も前に進む能はず、氏は全然是を無視し氏の都合よき様に解釋せんとす。余は Patalung が Talung となり更に Lung となる例を考ふれば、氏と反對に Tani は Patani の pa の省かれしものと認むるものなり（A. H. Smith, Five Years in Siam ii, index）原名が Tani にあらずして Patani ならば是を馬來語 Tanah の轉訛とは云ふべからず。而してかくの如き大膽なる省略をなすものは支那人にあらずやと疑ふ。支那人が外國名を省略し或は土名の存するにも拘らず支那名を附するは其の例少からず。殊に明以來支那人の是等の他に移住するもの多きを思へば、吾人の想像も必ずしも一理ならにあらざるべし。又高桑氏は Patani を暹羅人は Chana と云ふと云へど、そは何によりて云へるか

知られど、地圖には Singora の南、Patani の間に別に Chana あり、氏は是を混同せるにあらざるか。又氏は Tanah merah の merah が省略せられて Tanah となると云へど、かくの如きことは余は殆んど想像することなへ躊躇す。

最後に高桑氏は丹々國を説明して 「Tantalam 島（暹羅名 Kaw Yai）は蓋し Tanah Talung 即 Talung 州の轉訛したものであらう、而して Tanah Talung はもと Talung と Kaw Yai を包括せる總名であつたが、後 Talung の地は Patalung, Talung と呼ばれ Yai 島は Tanah Talung の古名が残り終に轉じて Tantalam となつたのはあるまいか、故に丹々國は Talung 本土と Tantalam 島とを包括せるものと見れば疑問は自ら氷釋するのである」と云へど、此の場合も Patani の場合の如く氏の如き臆測を爲す前に Patalung と Talung と何れが原名なるかを考ふる必要あり、余は氏と反對に Patalung が Talung

となり Talung が Lung となるものと考ふ。吾人は Tanah Talung の如く明瞭なる馬來語が外國人なれば兎に角馬來人自身が Tantalam と訛り、それに Pulau (島) を附けて Pulau Tantalam と云ふことを疑はざるを得ず。又若し氏の説の如く Talung, Kaw Yai を包括する Tanah Talung の名ありとするも、それが何故今日 Tantalam と訛りて Kaw Yai に限りて用ゐらるゝや、Tanah Talung の本地は Talung にて Kaw Yai は是に屬する島にすゑあるにあらずや。按ずるに氏の地名の解釋は臆測のみ鋭くして考證の是に伴はざる恨みあり。氏は又「丹々國を Tantalam とすれば赤土國の境域中にあること、なるから、隋書及新舊唐書に赤土丹々數國と順次に記載せるを根據として、丹々は赤土の南にあらねばならぬと云ふものもあらうが、支那史家の習癖で隋の時丹々は既に赤土國に入つて居たことを知らず、前代の史乘にあるから之を別國として隋書に記したのを



新舊唐書に之を襲踏して載せたものと見られるから敢て拘泥するにはあたらない、故を以て丹々を *Tan-*

*talun* の對音と見て之を *Yai* 島及 *Talung* 州の地に考定して差支へないであらう」と。氏は是の時丹々が赤土内に入り居りしを知らずと云へど常駿の赤土に使せるは是の時にあらずや。若し丹々が赤土内に包括せられ、赤土の都僧祇城 *Singora* の北に隣接せしとすれば赤土に使せる常駿殊に北の狼牙須より海岸に沿ひ南下し赤土に達せる彼が丹々を知らざる筈なし、然るに常駿は一言も丹々に就きて云はず。

要之吾人は僧祇城を *Sungkra*, *Singora* とするに疑を抱き狼牙須、赤土の四周及赤土の説明の不完全なるを考へ、且又義淨の赤土或は僧祇國の名を傳へざるを以て余は高桑氏の説には賛成する能はず。

附記 前記の論は昨年末になりしものなれど雜誌發行遅れし爲めその未だ公にせられざる間に高桑氏の第二回の反駁論を東洋哲學第廿七編第二號に見る

不便を生ぜり、仍てこゝに附記として第二回の反駁に對して簡單ながら批評せんと欲す。

一、婆達國 高桑氏は余が先きに宋書の闍婆婆達或は婆達國を唐代の婆登國と同一に見て西部 *Java* に比定せしに反對して婆達のみは今の *Sumatra* の *Batus* 或は *Batals* 族なりと云ふ。されど義淨及賈耽等を通じて *Sumatra* に婆達國のありしを云はず。又 *Balus* の使闍婆と共に貢せし故闍婆の屬國と認めて闍婆婆達と書けりと云へど然らば國王某は婆達王か闍婆王か、若し婆達王とすれば宋書が闍婆の入貢を記さるは如何。又氏が初めに婆達と婆登とを強ひて差別せんとするその理由如何。

二、干陀利國 氏は干(或斤)陀利は *Sumatra* の別名 *Indalus* 或 *Andalus* 説に左祖し、*k* が *h* に轉じ更に無聲音となれるものと云ふ。されど干(斤)陀利を除きて別に *Kandalus* 或 *Kindalus* の名あれば *Idalus*, *Andalus* はその轉訛にて、支那の干(斤)陀

利は Kan (or Kin) datus なりと云ひ得べし。されど Kandalus, Kindalus の存在を傳ふるもの無し、張燮が「舊港古三佛齊也初名干陀利」と云へる干陀利は梁書の干陀利を妄に比定せるまでにて當時 Kandalus の名ありてそれを干陀利にてうつせるにあらず。氏は又余が初めに干陀利 (Palembang or P. Condor) と云ひ、後に Pelliot 氏の干陀利 Pulao Condor 説に賛成せる態度を曖昧として非難すれど是は敘述の便宜にて前者の場合には干陀利を Pulao Condor とするも Palembang とするも何れにても可なりしが故、在來の説をあぐるに止め後者の場合は赤土を佛逝に比定する時なれば干陀利に對する此の兩説を批判する必要あり、そこに於て余は Pelliot 氏に賛成せるなり。されば是は敘述の順序にすぎず、然るを氏は是を逆に取つて Pelliot 氏の説に賛しながら干陀利 (Palembang or P. Condor) と云へるを非難するは余を誣するものなり。氏は又 Groeneveldt 氏が Kun-lun (支

那名) Kon-non (土名) Condore (外國訛) と斷定し同島は Small rocky island にすぎずと云へるを信ぜられど是は Groeneveldt 氏の誤解なり、土名としてあげたる Kon-non は支那名崑崙 Kun-lun の一とこの訛に過ぎず、是に反して氏が外國訛りとせる Condoreこそ土名なれ、賈耽は明に是を軍屯弄と書く、元の汪大淵は崑崙又名軍屯山と云ひ、Marco Polo は Condour と云ふ。されど崑崙の名も古く舊唐書に見え義淨の時既に是を掘倫洲と云ふ此の島は交通の要衝にあたる故支那史料には屢々あらはる唯其の國力小なる故入貢少きのみ、されど絶對に無かりしにあらず、冊府元龜によれば景龍三年崑崙國入貢を傳ふ。

三、訶羅單と訶羅陀 高桑氏は宋書の「訶羅單國治閩婆洲」を解して馬來半島に當時閩婆人の植民地ありて訶羅單 Kelantan と隣接せしかば、宋に入貢せし訶羅單の使者が誇張して云へるか或は支那人が

誤り傳へたるかの孰れかなりと云ふ。されど「治蘭婆洲」をかく解するは頗る無理なり、又氏があげたる Johor 海岸の Parit Jawa 閩婆濠の名は此の問題には參考の價值なし、何者閩婆が著しく馬來半島に發展せるは明代滿者伯夷(Majapahit) 國の勃興に始まる、Parit Jawa の起原をそれ以上に溯るは不可能の如し。氏は呵羅旦或呵羅單に類似せる地名が近代の地圖に見えずと云へど是は余等に取りては問題とするに足らざる論なり、Schlegel 及氏等の如く上代の國名を必ず現代の地圖に發見せざるべからずと考へ、又かくして發見せる現代の地名と上代のそれとの間の時間的聯絡を無視して顧みざる態度と余等とは根本的に研究法を異にす。

四、婆羅刺婆羅婆利 高桑氏は婆利婆羅の使者が常に林邑の使者と共に來たりしことを便船の乗り繼ぎと説明すれど、便船の乗り繼ぎのみなれば他の狼牙須、盤々、丹々等にも適用し得、余は別に特殊な

る説明を要求す、氏は又「Kota Bhârû は新城の義があるが恐らくこの地名は Bala 若しくは Barû であつて茲に築城なるに至つて Kota Bala 若しくは Kota Barû となつたのであらう、名詞 Malaya が Malayu の形容詞形になつて Orang Malayu(馬來人) Tanah Malayu(馬來州) Sungai Malayu(馬來河) Bhâsa Malayu(馬來語) となるのを見れば Bala, Barû が Balu, Barû となる變化が了解される、而して更に一轉して意義ある Bhârû となり Kota Bhârû となつたのであらうと思ふ」と。これど是は氏が Malay を誤解せる結果なり、Malaya は馬來語にあらず、是に就きては次に C. W. Harrison 氏の説を引く、The Modern Name by which the whole Peninsula is known in Malaya. Not so very long ago it used to be called "Malay." But to-day "Malaya" is used to express the Malay term "Tanah Malayu" and Ma'lay is the adjective describing

its inhabitants.—Illustrated Guide to the Federated Malay States, P. 23. 馬來人は Tanah Malaya を單に Malaya とは云はず、一般に馬來語には英語の如く固有名詞に變化なし。例へば Tanah Jawa, Tanah China といふ Tanah Jawu, Tanah Chinu といふ。要するに余は高桑氏の婆羅を Kota Bharu とするに賛成し難し。

五、Tanah Merah と Rakamritika 馬來半島の赤土に就きては高桑氏の研究によつて益々明かにせられたり、されど是れ丈にて隋の赤土を判定する能はず。又 Welleley の梵語刻銘中の Rakamritika を Malacca の語原とし唐の迷黎車を是に當つるに就きては疑あり、若し唐代に迷黎車 Malacca 國ありしとすれば義淨或は殊に Malacca 海峡の兩岸を詳記せる賈耽にその名の洩るゝ筈なし。且婆登の西を云ふ時に有名なる佛逝國を無視して佛逝の西の小國を引き來る理は無さにあらずや。Malacca の起原をしか

く上代に求むるには余は賛成する能はず。

六、赤土と室利佛逝との比較 高桑氏は「赤土の名は意譯であつて原名は傳はらなかつたから義淨の著書に絶えて赤土の名が見えぬのであらう従つて異なりたる名の下に支那に知られて居ても分からねのである」と云へるが、余は氏の所謂異なりたる名を指摘せんことを要求す。何となれば余は此の異なつたる名にて支那に通ぜしを信ずるものなり。氏は又「婆利は室利佛逝即ち Palembang の東南に當るのであつて東ではない、然もその中間に閩婆があつて室利佛逝に接近して居る、閩婆が隋以前既に支那人に知られて居るにも拘はらず、何故に閩婆を措いて殊更に婆利の如き小島を記して居るのであらうか」と云へど余は閩婆を無視するものにあらず、呵羅旦を閩婆にありし國と見るものなり、又氏は Baii を輕視すれど同島は隋以前より支那に知られたる島なり。氏が又余が赤土の北の大海を滿刺加海峡なりと

云へりとするは是れ亦余を誣するものなり。

七、赤土の國名 八、赤土國の位置 上の二條は余の既に説きし所なればこゝに再説する要なし。

九、赤土國の故地に於ける崇佛の事實 高桑氏は *Singora* の後に *Pagoda* あり、*Tani* 州の *Ta-Sap* 附近の鐘乳洞に餘り古からざる石佛あるを擧ぐるも是は參考として何の價值なし、近世イスラム教の侵入前に於て南海地方に國を作るもの皆印度文化國なり。されば余は赤土と佛逝との類似として共に佛教隆盛の大國と云ひ、單に佛教國とは云はず、即ち文化の種類に就きて云へるにあらざる程度に就きて云へり。然るに高桑氏は第六條の中に余が初めに張變攻撃中に「崇佛の點を以て赤土の比定を試みんか比定に迷はざるを得ず」と云ひながら後に「隋書赤土傳によれば赤土は當時南海に於ける佛教隆盛の大國なり、此の點兩者相似たり」と云へるを嘲けるも是れ亦余を誣するものなり。又氏は *Singora* の後の *Pagoda*

を如何なる時代の作なりや否やに就きては一言も云はず時代の觀念を無視せるも、若し假りに是を隋時代のものとするも余等が是を狼牙須の遺跡と云ふ時は如何。

十、*Tani* の古傳説 高桑氏は *Sajarah Malayu* の中の *Patani* の古傳説を引用す。余を以て見れば此の傳説はそのまゝ信用するか或は *Patani* なる地名を解釋するために起りし傳説と解するか何れにせよ原來の地名は *Patani* にて *Tani* はその省略なること明かなり。然らば *Tani* を *Tamah Merah* の *Tanai* に原由すと云ふ氏の説は成立せず。又同書にある *Cota Maleyei* の名を氏は「*Cota Malayu* の轉訛とも見られるが或は *Cota Merah* の變形ではあるまいか何となれば馬來文字の *r* と *i* とは混同し易いのみならず、また *Merah* と *Melisei* とは聲音が似て居るから誤り易いのである」と云へど *Cota Malisei* は明に *Cota Malayu* なり、又 *r* と *i* とは決して混同し

易き文字にあらず。兎に角氏は *Patanii* 附近を赤土にせんとして種々地名の解釋を試むるも皆牽強附會に陥れり。

最後に余はかくの加き一般讀者に取りて一向に興味なき問題のために貴重なる紙面を分與せられし東洋學報編輯者に多大の感謝の意を表して擱筆す。

(完)